

1. 日 時 平成30年5月19日（土）15時00分より17時00分まで
2. 場 所 いわき市石炭・化石館（愛称ほるる） 講堂（入場無料）

やましろよしむね やましろ ともえ  
**第一部 山代吉宗と山城巴** 獄中手記書簡集について

**山城吉宗プロフィール 飯場頭の子として・・・**

彼の父親山代広次郎は、現在の島根県大田市大森町、徳川時代には幕府直轄の大森銀山のあったところで生まれている。戸籍を見ると広次郎は明治9年に生まれ、15年には父を失っている。そこから彼は、7歳の幼少で生野銀山の鉾山組頭のもとへあずけられることになり、生野銀山を振出しに、筑豊、足尾、夕張と鉾山を渡り歩いて、明治28年、福島県石城郡内郷町宮にあった町田炭鉾の飯場頭、岡本実治郎のもとに鞋（わらじ）を脱ぎ、彼の養子という名目で飯場を与えられている。吉宗の実母クニからの聞き書きによると、クニは平藩の下級士族松永善左衛門の子で18歳のとき、24歳の広次郎と結婚したことになる。「すでに町田坑で実力を誇っていた広次郎との婚礼は、きわめて豪勢なものであった。平町じゅうの芸者を総あげし、かん徳利50、盃100を買い入れ、会社役員、友子、身内と三部に分け、三日三晩のにぎやかな祝儀をつづけた。芝居の一座を買い切って町田坑によび、人々に見せることもした。」

ここには少々のはらもあるだろうが、無学文盲、少年期から坑内で働いてきた24歳の青年としては、驚くような華やかな祝儀で、当時の飯場の暴利が窺える。

吉宗は明治34年7月7日、広次郎とクニの長男として町田で生まれている。36年2月妹マチ子が生まれて100日たたない4月、町田炭鉾の坑道が附近の川の川底にふれ、坑内が水びたしになり廃坑になったので、広次郎は磐城採炭株式会社の小野田坑に飯場を移し、吉宗を養父岡本実治郎のもとに残した。吉宗はこの時から10歳まで実治郎を真の親と思い込んで成長した。この7年間の間に、小野田に移った父母の間には、彼の知らない悲劇が起こっていた。（増補 山代 巴獄中手記書簡集』 牧原憲夫編 より抜粋）

⇒⇒⇒その後吉宗が辿った道は？ 獄中から妻巴との手記のやりとりは・・・？

まきはらあきこ  
**○講師 牧原 暁子氏**

上記書簡集著者牧原憲夫氏（故人）夫人。1946（昭和21）年東京生まれ。大学卒業後、1970（昭和45）年から＜新日本文学会・朝鮮語入門講座＞＜朝鮮文学会＞＜現代語学塾＞などで朝鮮語を学び、韓国の小説を読む。1989（平成1）—92（平成4）年現代語学塾臨時講師、2002（平成14）—05（平成17）年、韓国留学。

**↓裏面に続く**

## 第二部 全炭博研 in 宇部・大嶺炭田に参加して

### 1. 巡検

宇部興産専用道路上にて宇部興産の由来を学ぶ「全国石炭産業関連博物館等研修交流会 2017」は、山口県の宇部炭田と大嶺炭田という、地質学的に異なるエリアをフィールドに、4日間の行程でスタートした。参加者は、宇部市石炭記念館のあるときわ公園と山口宇部空港で13時過ぎに集合。バスにて全国でも珍しい、民間企業専用の高速道路＝宇部興産専用道路を通りながら、美祢市の伊佐セメント工場へ向かった。

バス内での案内役は、元宇部興産社員の田中利男氏。氏からは宇部興産の歴史と、この宇部興産専用道路について説明して頂いた。宇部興産の歴史では、1897（明治30）年操業の沖の山炭鉱操業を皮切りに、石炭を天産物と崇め、宇部のまちづくりに力を注いだ沖の山炭鉱創業者、渡邊祐策翁の経営理念に基づく活動について教えて頂いた。渡邊翁は、石炭で挙げた利益を地域との「共存同栄」の考えでまちづくりの費用に充てると同時に、有限の「鉱業」から無限の「工業」へ産業を発展させるべく、宇部新川鉄工所、宇部セメント製造、宇部窒素工業と続々と起業し、今の宇部興産グループに発展させていった。実際、宇部興産は沖の山炭鉱創業から数えて今年で120年。沖の山炭鉱が閉山してから50年の節目を迎えるなか、盛業している事を考えると、渡邊翁の先見性と経営力は素晴らしい物がある。

・・・以下省略（全炭博研報告レポートより引用）

## 炭田二都物語 いわき市と宇部市について

いわき市には常磐興産株式会社、宇部市には宇部興産株式会社、本州にあるこの二つの都市はともに石炭をルーツとする上場会社の本拠地として歴史を積み重ねてきました。・・・

### ○講師 まのめたいち 馬目 太一 氏

いわき地域学会、NPO法人常磐炭田史研究会会員。2017（平成29）年10月20日（金）から10月24日（火）にかけて山口県で開催された第7回「全国石炭産業関連博物館等研修交流会（略称全炭博研）」に常磐炭田代表として参加してきました。

10月22日（日）宇部市ときわ湖水ホールにて実施されたメイン行事、全炭博研シンポジウムでは基調講演のあと事例報告のトップを切って「常磐炭田の概要及び＜常磐炭田史研究会＞と＜いわきヘリテージ・ツーリズム協議会＞の紹介、そして宇部との関係について」という題で講演をしてきた訳であります。同じ産炭地宇部市、東日本大震災ではいち早く応援に駆けつけた宇部市、を見ることで、いわき市の見方が少し変わるかも知れません。

※問い合わせは 野木和夫 0246（26）0228まで